

第6回新生匝瑳戦略会議 会議録（概要版）

開催日時：平成23年6月16日（木）

午後7時00分～9時30分

開催場所：八日市場ドーム選手控室

出席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃、渡辺新

（団体推薦者）安藤建子、宇野充紘、萱森孝雄、鈴木和彦

（一般公募者）岡田陽子、永野亮太、林暁男、八木幸市

（11人／名簿順）

欠席委員：（団体推薦者）越川竹晴、越川八代枝、橋場永尚

（一般公募者）大塚栄一

（4人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）木内課長、大木副主幹、富井副主査（3人）

1 開 会

2 あいさつ

3 議 事

（1）「国保匝瑳市民病院の再建に関する意見書」について

前回に引続き、「国保匝瑳市民病院の再建に関する意見書」について協議を行った。委員からは「異議なし」という見解で一致し、戦略会議からの意見書ということで直接市長へ手渡すこととした。文章については、説明が足りない部分については委員長が補足し、表現等については事務局で調整することとなった。

（2）匝瑳市の里山の生物

（3）旧飯高小学校施設の利活用について

生物について研究している委員から、「匝瑳市の里山の生物」ということで、里山の主要生物で絶滅危惧種に指定されている「トウキョウサンショウウオ」について報告された。以下は主な項目。

- ・千葉県全域を調査した結果、特に匝瑳市北側の丘陵地帯でトウキョウサンショウウオ

ウウオの生息密度が高い。

- ・親は林の中の小動物を食べているので、しっかりとした斜面のある林の中でなければ生きていけず、林と産卵する水場がセットでないと生活は難しい。
- ・調査した地域は、敬愛高校から北側に約 500m行った地点で、この地域での産卵数は 600 前後。
- ・千葉県全体として生息数は減っているが、匝瑳市で調査した範囲では大きな変化は見られない。その理由は、匝瑳市の農家がやっている溝堀がポイントである。
- ・溝堀の開始が 1 月という時期的なものも重なり、農家が稲作のために掘った溝に、山から染み出てきた水がたまると、そこが産卵場所として非常に都合が良かった。
- ・反対に、農家が稲作をしなくなってしまうと、休耕田が増えて溝が埋まってしまうため、産卵場所として良くない環境となってしまう。里山として残っていくということが、トウキョウサンショウウオを保護していくことにつながる。
- ・一般の人にもこの地域のことを知ってもらおうと、農家から水田と林を借りて、そこを里山ビオトープとして整備し、登録した。保護していくためには、まず知ってもらうことが大事で、頻繁に観察会などを実施。
- ・農家にも協力を依頼し、溝堀の時期を調整してもらおうよう呼びかけている。
- ・関東地方にしか生息せず、千葉県が最も多い中で、匝瑳市の生息数がかなり多いということから「世界一のトウキョウサンショウウオの生息地」といえる。
- ・歴史的価値のある旧飯高小学校の施設を活用し、博物館的な展示に加えて「里山センター」のようなスペースができれば、歴史的なことに加えて生き物についても周知を図れるのではないか。

◆各委員から出された意見等

- ・材木の価値感が変わってきている。昔は自分の山の木を切って、家を建てていたため、良い材木を得ようと山の管理をしっかりやっていたが、今は輸入材木が安いので、ほとんど価値がないために放置してしまっている。
- ・山を放置していることが、生態系に影響している。地域の生業と生物多様性は、関連してくる問題である。生態系の問題を抜きにして勝手に管理してしまうと、生態系が壊れてしまうので、そこが難しい。

- ・ 都会から来る親子などをターゲットにすれば、ザリガニは捕まえられるし、自然は満喫できるし、外からの仕組み作りも面白い。
- ・ 報告では生物多様性の側面が中心だったが、整備して散策をすとか、里山の利用については目的がいろいろある。
- ・ 里山については、市外から見ると魅力的なイメージがあるが、地元の人には手に余ってしまっている。
- ・ 都会でも田舎でも、そこに住んでいる地元の住民がどういう意識を持つかということが大事。

(4) 市民参加のまちづくりについて

委員から「自分ごと基本ソフト」導入のための仕掛けづくりということで、「市民病院応援隊」、「八日市場中心市街地応援隊」、「学区ビジネス仕掛け隊」などについて提案があった。以下は主な項目。

- ・ 田園空間博物館というのがあり、その中身は、水車、トウキョウサンショウウオの生息場所などで、それをサテライトと言う。そのサテライトを繋ぐのが遊歩道で、そういうコースを何コースか設定し、1時間とか2時間で回れるものを作る。
- ・ 土壌、水系、地形、植生のように、地域を自然立地区分していき、そこへ人間の生活空間も配置していく。最近の市民協働でいうと、地縁組織の強いところと弱いところ、自営的農家と兼業的農家、などをどんどん分析的に足していき、足りないところにNPOなどのグループを入れ込む方法もある。
- ・ 南房総にある安房拓心高校の土木部では、部活動の一環として、学生が山の測量や階段の整備、メンテナンスを行ったりしている。
- ・ 公共の担い手は行政だけでなく、市民や企業、高校などもパートナーとして「自分ごと」として関わられるように巻き込んでいくと、その周りに活力が生まれ、そういう雰囲気を感じられると、人はそこへ引き寄せられていく。
- ・ 病院やJ T跡地についても、そこだけ切り取って考えていくといいことがなくて、地域の課題や資源とセットで考えて、それらを生かすためにはどうしたらいいのか、また自分たちが楽しめることはどういうことか、という視点を持つことが大事である。

◆各委員からの意見等

- ・巻き込んでいけないもどかしさはある。里山に関しても、自分がこうしたいというアイデアはあるが、なかなか理解してもらえず、仕事ははかどらない。
- ・林業組合へ「管理ができなければ代行します」ということを要請しているが、なかなかそういうものは出てこない。
- ・中間支援ということで、地縁組織とNPOを繋ぐという方法もある。地域の情報に長けていて、なおかつ裏も表も知っている明るい人材を育てていくということが大事である。
- ・小学校で食農教育を行って、そこから自然とか土地の利用の仕方を学ばせたいと思っているが、その活動にどう理解してもらうかが課題である。自分たちがやりたいと思っても学校や先生の協力が不可欠で、周りにどれだけついて来てくれる人材がいるかが大事だと思う。
- ・市の魅力を聞かれたら「自然が多いところ」と答える人が多いのに、実は「放っておけばいい」と思っている人も多い。そうではないということ、まずわからなければならないし、そうではないから維持できている、ということをも市民に知ってもらわなければいけない。
- ・横浜市では、1世帯90円で「緑税」という特別目的税を取っている。税金を取ることを通じて「維持するためにはお金がかかる」ということを広報している。
- ・基本ソフト導入のための財源を確保するため、市民から寄付金を集める仕組み作りをしてはどうか。基金を作り、集まった基金と同額の予算を市も負担し、寄付金を出す人はどの事業に使ってほしいかを指定できるようにすれば、動きが出るのではないか。
- ・J T跡地はそんなに利用目的を考えなくてもいいと思う。市民の底上げができれば、後は自然といろいろやっていくようになるのではないか。
- ・暫定でも目的をちゃんと持たないと、単に事業を実施して終わりということになる危険性がある。目的が「基本的な考え方を変えていく」という方向にならないといけない。

(5) その他

◆J T跡地の暫定利用について

4月に市へ買戻しをしたJT跡地で、「がんばる匠 まちづくり駅前市場」と題し、テント村等の出店という形態で、年3回ほど物産販売などを行う暫定利用がスタートしたことを報告した。

委員から「なぜ多目的に使える『普通財産』ではなく、商工業目的に限定された『行政財産』として取得したのか」との質問があった。

市では「市が直営で関わり、暫定といえども利活用を図っていく上では、行政財産としての取得が必要で、行政財産という位置付けはしているが、戦略会議の議論を縛るものではない」という見解であるが、委員から「縛らないと言われても、客観的に考えて商工業目的の行政財産という縛りがあるので、本日提案のあった「自分ごと基本ソフト」導入のための仕掛けづくりに影響してくるのではないか」という指摘があった。

財産区分については再度整理し、次回の会議で改めて説明することとなった。

4 閉 会